

世界観の論理

永井成男 著

早稲田大学出版部

世界観の論理

永井成男 著

早稲田大学出版部

永井成男（ながい・しげお）

1949年 早稲田大学卒業。

現在 東洋大学（短大）教授、早稲田大学講師。

日本科学哲学会理事

主 著 分析哲学（弘文堂）

現代論理学の基礎（有信堂）

現代の哲学的論理学（共著、東海大学出版会）

科学哲学概論（共著、有信堂）

科学と論理（河出書房新社）

分析哲学とは何か（紀伊國屋書店）

哲学的認識の論理（早稲田大学出版部）

基礎論理学（共著、早稲田大学出版部）

世界観の論理

双書現代の論理

1976年9月10日 初版 第1刷発行

1982年4月20日 初版 第4刷発行

検印省略 著 者 ©永 井 成 男

発 行 者 城 下 幸 雄

発 行 所 早 稲 田 大 学 出 版 部

160 東京都新宿区戸塚町 1-103

振替東京3-1123 電話(03)203-1551

1310-1305-9314

安信印刷・東栄社製本

目次

序論

第一章 現象主義的世界観の現代的意義

- 一 “世界観”とは何か……………七
- 二 “現象主義”とは何か……………三
- 三 現象主義の現代的課題……………三

第二章 反形而上学の立場

第一節 科学的真理とは異なった形而上学的

真理は可能であるか……………四

一 意味論による真理の定義……………四

意味論とは何か……………四

真理の対応説……………五

真理対応説と認識換字説……………五

「真」という述語の適切な定義……………五

二 形而上学的真理の可能性の検討	四
------------------	---

言葉の外延と内包 六

言明の外延と内包 六

形而上学的真理の不可能性 六

第二節 科学的意味性とは異なった形而上学的

意味性は可能であるか	五
------------	---

一 「意味性」という概念における意味論的視点と

語用論的視点の区別	五
-----------	---

経験主義の意味基準と意味の検証理論 六

意味と意味の認識との区別 一〇

二 形而上学的意味性の可能性の検討	一〇
-------------------	----

クワインの反二元論と連続主義 一〇

形而上学的意味性に関するカルナップ的立場とクワイン的立場と

の止揚 一一

第三章 反形而上学の立場の止揚と

現象主義的世界観の立場	一七
-------------	----

第一節 寛容の原理に基づく反形而上学の立場	一七
-----------------------	----

一 論理学の原理としての寛容の原理	一七
-------------------	----

寛容の原理と規約主義との区別	一七
論理学上の客観主義としての論理主義	二六
論理学のメタ科学的、記号論的側面	三三
メタ論理学の本性	三六
対象理論面における論理学の本性	三八
認識論の原理としての寛容の原理	四四
論理学と認識論	四五
内的存在問題と外的存在問題	五三
第二節 現象主義的世界観の哲學的基礎	五七
一 寛容の原理から現象主義へ	五七
純粹論理学、形式論理学および認識論	五九
記述的記号の解釈における意味論的視点と語用論的視点の区別	六四
一の修正	六五
二の修正	六七
存在論的存在文の疑似言明性	六八
経験主義の原理	七〇
「疑似言明」という概念	七九
寛容の原理の根拠	八二
二 哲學的分析の本性と現象主義的世界観	八五
哲學的分析における直観と思考	八五

哲学的分析と弁証法との接点 二三

論理的分析における科学的視点と哲学的視点との関係 二三

寛容の原理の直観的基礎 三三

第四章 価値論の現象主義的基礎……………三九

第一節 価値論とは何か……………三三

一 理論と実践……………三三

真理は価値か 三三

真理概念の二重性 三六

二 科学と前科学……………三六

三 対象科学とメタ科学……………三六

価値論における対象科学とメタ科学 三六

科学のメタ理論面の規範的性格 三六

第二節 価値情緒説とは何か……………三五

一 価値主観説の代表としての価値情緒説……………三五

二 価値情緒説と規範科学は両立できるか……………三五

第三節 価値主観説対価値客観説の対立とその止揚……………三六

一 分析的価値論における価値学説の分類への異論……………三六

二 「表現的意味」という概念の二重性……………三六

三	指示的意味における認識的意味と非認識的意味との区別	三六
四	価値現象主義の立場	三七
注		三七
あとがき		

序 論

常識的な哲學觀によると、哲學の目的ないし任務は人生觀を含めた世界觀の形成にある。常識のレベルでの答えとしてはもちろん間違つてはいない。しかし學問のレベルでの答えとしては大幅な修正を要するのも事実である。世界觀の形成に必要な知識は決して哲學だけでは得られない。いかに該博な哲學の知識を所有していたとしても、それだけで世界觀が得られるわけではない。常識のレベルで考えても、世界は自然界と人間界（「社会」）を包括した全体であるから、自然界についての自然科学の知識と人間界についての人文・社会科学の知識を欠いては世界觀は得られないことは自明である。つまり常識のレベルでも世界觀の形成には科学の知識が不可欠なことは了解している。それならば、世界觀の形成は科学の知識だけで十分であるのか、と問えば、多くの人々は「いいえ」と答えるだろう。世界觀にとって人生觀が不可欠であるかぎり、科学だけでは世界觀は得られないと感じているに違いないからである。人生の目的とか意義とかを論ずるには価値觀が必要である。しかるに科学は価値觀に関しては中立的（ニュートラル）な立場で、ただ事実がいかにあるか

をあるがままに記述していく記述的態度を取る。つまり、科学の言語の中には、「よい」、「わるい」のような価値語や「べきである」、「べきでない」、「せねばならない」、「してはならない」のような規範語は含まれていないので、人生の目的や意義について科学の言葉で語るわけにはいかない。

そこで人々は科学から排除された価値の問題を論ずる学問として哲学に期待を寄せることになる。実際、価値論は今日でも哲学の重要な部門である。様々な価値があるが、無神論者は別として、多くの人々は「聖」と呼ばれる宗教的価値があると考えている。科学が宗教を論じないのは、科学が価値観に関して中立的であるからというにとどまらない。聖なる価値を担う存在者としての神なるものは科学的認識の対象とはならない、という一層根本的な理由からである。唯物論のような無神論の哲学の立場から論ずれば、神なる存在者は空なるものであり、したがって聖なる価値も空なるものである。だが、科学が神なる存在者を対象にしないということ、唯物論の哲学が神の存在を否定することとは同一ではない。科学の対象ではないというだけの理由でそれを否定することが正当化されるものならば、価値もまた科学の対象ではないという理由で否定してよいことになる。常識のレベルでも科学が神のような存在者を対象としない理由は或る程度了解している。科学は直接的ないし間接的にわれわれ人間の五感によって知覚可能な対象だけを扱う、つまり経験によって確かめることのできる対象だけを扱う。哲学用語を使って言い換えると、科学は直接的ないし間接的に観察可能な対象、つまり経験的に確認可能（＝検証可能）な対象だけを扱う。神は経

驗的に確証可能な対象ではないから科学の対象とはならないのである。こう言うと、物理学が対象にしている電子などの素粒子は確証不可能ではないかと反問されるかもしれない。なるほどそれは直接には観察不可能な対象である。しかし、素粒子の存在を推定できるような事実は直接に観察可能なのであるから間接的には観察可能であり、したがって経験的に確証可能な対象なのである。

科学は経験的に確証可能な対象だけを扱うが、「超経験的な対象は存在しない」と積極的に主張しているわけではない。したがって神は超経験的な対象であるので科学は対象としないだけの話で、科学が神の存在を否定する無神論の哲学を正当化する根拠を持ち合わせているわけではない。超経験的な対象を肯定するにしろ否定するにしろ、対象の存在者としての在り方を問う、換言すれば「対象が存在する」ということの意味を問題とする学問が必要である。かような学問が存在論であり、価値論と共に重要な哲学の部門である。科学の対象となる存在者には、大きく分けて物質、生命、精神の三種類があるが、科学はそれらの存在者の在り方（し存在の仕方）については無知である。つまり、物質が存在するという、その在り方、生命が存在するという、その在り方、精神が存在するという、その在り方、またそれらの関係について科学は無知なのである。たとえば、物理学はそれらの存在者の在り方については不問に付した上で、物質を対象とし、物理学の方法のもとで世界の物質的側面を認識し、その結果として物理学の視点からの世界像が知識として得られる。同様に、生物学は生命のある物質としての生物について、心理学は精神のある生物としての動物や

人間について、それぞれの視点からの世界像を求めていく。だが、それら三種類の存在者の在り方について無知な科学の視点からは、それらの世界像を統一して世界観にまで仕上げていくことはできない。

かくして、部分的な世界像を全体的な世界観にまで仕上げるには価値論や存在論が不可欠であることが了解できるであろう。だが、唯物論の影響を多分に受けている現代人の常識のレベルで論ずると、仮に価値観を抜きにして理論的な視点だけから言えば、つまり一面的ではあるが人生観を度外視した世界観ならば個別科学の部分的な世界像を科学的な世界観にまで仕上げることは可能であるように思える。生物が単なる物質には見られない生命現象を呈するからと言って、物質とは別に生命なるものが存在するわけではない。生命は単なる物質には見られない機能ではあるが、物質の機能としての在り方以外の在り方を持つてはいないのではないか。なるほど生物学者の中には、生物を結局は機械に過ぎないと見る機械論に反対し、生命、力という物質的、機械的な存在者には帰し得ない特別な存在者を認める生氣論を支持する人々が少数ながら存在している。しかし大勢は機械論であるという理由から機械論的生命観が生物学の代表的生命観であると見なされている。同様の考え方で、機械論は単なる生命現象以上の精神現象を呈する人間などのような高等動物も結局は機械以上のものではないと見る。精神はとりわけ大脳の機能であり、物質の機能としての在り方以外の在り方を持つてはいないと考ええる。

このように考えると、生命や精神は物質とは異なった在り方を持つ特別の存在者ではなく、唯一の存在者は物質である。生命や精神の在り方をこのように了解する存在論が物質一元論としての唯物論に他ならない。ところで問題なのは、少なくとも大勢においては科学は唯物論を支持しつつあるのではないか、ということである。結論的に言うと、常識のレベルでは説得的であるかもしれないが、哲学のレベルで厳密に論ずれば、科学の限界内で可能な世界像と科学の限界を越える形而上学を必要とする世界観とを混同した不当な考え方なのである。なるほど、科学の現大勢においては、生命も精神も物質の機能として扱われつつある。だが、科学は生命や精神の在り方を問う存在論において唯物論を支持した上でそのような世界観を形成したのではない。物質の機能として扱い得るかぎりにおいて生命や精神を科学の対象としただけであり、生命や精神の在り方を存在論的問題としているのではない。したがって機械論的世界像が得られたにとどまっている。唯物論的世界観を説きたければ、存在論を欠く科学の機械論的世界像を科学的世界観であるかのように強弁することをやめ、唯物論という存在論を正当化する論拠を積極的に提示しなければならない。

存在論には、唯物論とは対立する様々な立場がある。たとえば精神一元論としての唯心論、物心二元論、心性一元論（物でも心でもない中性的存在者の一元論）などがある。これらの立場も、唯物論とは違った仕方ではあるが、生命や精神を物質の機能として扱う機械論的世界像を科学としては十分に受に入れた上で、それぞれの存在論を正当化しようと努力しているのであり、それらの哲

学が科学の立場と矛盾するかにように強弁する一部の唯物論者の議論は粗雑である。

議論を単純化するために、常識に妥協し、故意に科学は価値を全く対象にしないかのように論じて来た。だが、この点を修正して一層厳密に論ずることにしよう。科学を自然科学に限定するならば以上の議論はそのまま維持できる。だが、人文・社会科学を科学に含めるならば正しくないものとなる。人文・社会科学は、まさに価値の付着した存在者を対象にしているからである。たとえば、この机は自然科学の対象であるかぎりにおいては単なる物体であり、価値なるものがその物体に付着しているとは考えない。この机から価値なるものを抜きにして対象としなければならない。だが、人文・社会科学の視点からは、この机は単なる物体ではなく価値の付着した対象である。たとえば経済学の視点において、この机は商品であり、経済価値としての商品価値の付着した対象として扱わなければならない。人文・社会科学は価値の付着した対象を扱うが、かような対象に価値が付着しているとはどういう意味であるかを追求しない。この問題を扱う学問が前にも触れた価値論である。したがって、人文・社会科学の対象の在り方を存在論的に明らかにして全体的な世界観に仕上げるには価値論は不可欠である。価値を抜きにして取り上げられた物質、生命、精神の存在者としての在り方は、価値を考慮に入れるとき、単なる存在論の範囲内では解明できないものとなる。すなわち存在論と価値論とが結合しなければ世界観に仕上げることはできないことが明らかとなった。

ところでこれまでの議論では、科学の範圍を自然科学と人文・社会科学に限定して來た。これも常識に妥協した単純化であつて修正を必要としている。数学と論理学から成る形式科学は、哲學的學問論における嚴密な學問の分類法によれば、自然科学にも人文・社会科学にも属さない別系列の科学である。大学のカリキュラムの場合、教育上の便法として数学は自然科学の系列に、論理学は人文科学の系列に歸属させられることが多い。無批判にこうした分類法を前提にして諸科学の關係を考へていると、哲學の立場からの學問論を理解することを妨げる結果となる。哲學によつて正当化された學的な世界觀を形成するには、哲學的學問論は不可欠である。そこで、論理学を人文科学と見なし、数学を自然科学と見なすような常識的學問論は是非とも脱却しなければならない。

まず、数学が自然科学に属さない理由から論じよう。自然科学の知識は、科学である以上、それを真であると断定するには証明が必要である。その証明は經驗的な確証(confirmation)あるいは検証(verification)と呼ばれる種類のものである。それはまた簡單に実証とも呼ばれる。自然科学的知識を表現した文、つまり自然科学の言明(statement)は經驗的言明であり、その真偽を確かめる証明法は実証である。この点は人文・社会科学も共通であり、それらの科学は実証科学あるいは經驗科学として特徴づけられる。

では数学はどうか。数学の知識の真偽を確かめる証明法は実証ではない。実証は究極において觀察による証明のことである。実験は觀察の特別な方法に過ぎないから、実験科学も非実験科学も、

その証明が究極において観察であるかぎり、すべて経験科学である。自然科学の一部と人文・社会科学の大部分は非実験科学であるが、実証を証明法とする経験科学である点では実験科学と共通の性格を持つ。数学が非実験科学であることは、数学者が実験室を持っていないことから推察されるが、理論物理学者が実験室を持っていないのとは事情が異なる。物理学は自然科学の中で最も発達した基礎的部門である。そこでは、分業の必要上から、直接に実験を分担する実験物理学と、理論構成の方面を分担する理論物理学との分科が生じている。しかし、理論物理学の言明は経験的言明であって、最終的には実験物理学者によって実験的に確証されるべきものである。一方、数学的言明は最終的に自然科学者によって、あるいはまた人文・社会科学者によって実証されるべき経験的言明ではない。数学の証明法は実証とは全く異なる種類のものである。それは観察を少しも必要とせず、ただ単に理論的な考察だけを必要とする証明法であり、実証に対して論証と呼ばれる。数学は実証科学ではなく論証科学である。哲学においては、カント以来、言明の真偽を確かめる証明法が実証的であるという特徴を、後天的とか経験的とか言い、またその証明法が論証的であるという特徴を、先天的とか先験的とか言つて来た。そこで数学によって代表される論証科学のことを、先天的あるいは先験的な科学とも言うのである。

では次に論理学が人文科学に属さない理由を論じよう。既述の通り人文科学は経験科学に属する点で自然科学と共通の性格を持っている。しかるに論理学的言明の証明法は実証ではなく論証であ

るから、論理学は論証科学であり先験科学である。したがってこの点で論理学は数学と共通の性格を持つてゐる。論理学の先験性は、かなり古くから知られてゐた。だが、十九世紀の半ば頃にイギリスの数学者で論理学者のブールが論理代数という形で論理学の数学化に成功するまでは、論理学は数学には属さない哲学の部門であると一般に信じられて来た。ただ、例外的にライプニッツだけは論理学と数学の関係を正しく把え、今日の記号論理学（＝数理論理学）の先駆者となつた。カントはこの点ではライプニッツよりも後退し、論理学は数学とは異なる——先験性という共通性はあつるが——哲学の部門で、本質的には古代ギリシアのアリストテレスによつて既に完成された学問であるという誤つた思想をいだいてゐた。論理学がアリストテレス以来、殆ど発達が見られなかつたのは、それが完成した学問であるからであると彼は考へていたのである。論理学が未発達であつたのは、論理学と数学との関係についての学問論的考察において誤つてゐたからである。論理学は数学であるのであるから、「論理学は数学ではない」という誤つた思想から論理学の発展は期待すべくもない。

ところで、論理学を人文科学と見なす誤つた思想の背後にある思想を検討してみよう。論理学は数学ではなく哲学に属するという思想が背後にある。「論理学には哲学に属する方面がある」という主張であるならば、現時点においても正しい。何故かと言うと、論理学に属すると見なされる知識のすべてが精密科学の大準に達してゐる数学として公認されてゐるわけではないからである。や